

令和五年度

第十七回

稲敷市

青少年

主張大会

の  
Inashikishi  
seisyonen  
no  
syucyo  
taikai

作文集

青少年の声に  
耳を傾けてみませんか？







青少年育成稲敷市民会議  
会長 和田 克典

## ごあいさつ

青少年育成稲敷市民会議の活動に対しまして、市民の皆様には、常日頃から多大な、ご理解とご支援を賜りまして厚く御礼申し上げます。

さて、第17回稲敷市青少年の主張大会は、市内の小中学生(4名)・中学生(4名)・高校生(2名)の10名の皆様に、発表していただくことになっております。10名の皆様には、日々の学校生活を送る中、大変素晴らしい発表内容にまとめてくださいました。心より感謝を申し上げます。

発表内容は、①社会での出来事を通して学んだこと、②周りの人や社会のためにより行動することの大

切さ、③今の自分自身をしっかりと見つめ、信じながら生活することの大切さ、④性の多様性について、真剣に考え理解することの重要さなどについてです。特に、発表者一人一人が、社会での出来事や自身自身のことをよく考え、よく理解し、そのうえで実際に行動されていることは、本当に立派なことだと思います。

さて、最近では、少子・高齢化のため、子どもの数の減少や地域社会における交流やつながりなどの希薄化も進んでいます。そのため、子ども同士や地域の方との触れ合いが不足したり、またコロナ禍による影響で、対面形式による発表などが制限されたりしてきました。そうした中、青少年の皆

さんが、自分の意見を直接発表したり、それをお互いに聞いたりして学び合う機会があることは、とても重要な意味を持っています。

青少年の主張大会に対して、市民の皆様や関係者の期待や要望も年々高まってきております。今回も無事に開催できることは、とても嬉しいことです。

最後になりましたが、事務局の方々はじめ、市民会議の関係者の方々、そして、ご協力・ご支援をいただきました教育委員会の方々、厚く御礼申し上げます。

また、発表に当たり熱心にご指導くださり、いろいろとご負担をお掛けしました学校の先生方や保護者の皆様にも心より感謝を申し上げます。

皆様、本当にありがとうございました。

# 目次

## ■ごあいさつ

青少年育成稲敷市民会議

会長

和田克典

1

## 作文発表

### 小学生の部

#### 1 充実した生活を送るために

沼里小学校

六年

清宮

愛

4

#### 2 小さな一歩から

高田小学校

六年

稲箸

祐

星

6

#### 3 笑顔で明るく生きられる未来

桜川小学校

六年

高須

莉那

8

#### 4 私たちにできること

あずま西小学校

六年

藤ヶ崎

瑠花

10



中学生の部

5 ひとつの言葉

江戸崎中学校

二年

大野そよ

12

6 「優しさ」とは何でしょう？

新利根中学校

二年

川嶋

凜

14

7 読書の魅力

桜川中学校

二年

船串

梓

16

8 ルールやマナーの大切さ

東中学校

三年

山中夢叶

18

高校生の部

9 行動することの大切さ

江戸崎総合高等学校

二年

黒田龍毅

20

10 私が私でいられるのは

江戸崎総合高等学校

二年

中村颯夜

22

■ 講評

稲敷市教育委員会指導室

川村満博 24

## 1 充実した生活を送るために

沼里小学校 六年 清宮 愛

私たちを取り巻く社会では、国際

問題、経済問題、環境問題、人権問題など様々な問題や課題に直面しています。テレビやインターネットのニュースでは、それらについて多くが語られ、解決に向けて人々が、働きかけをしています。しかし、そんな状況の中、私はあるきっかけが起る前まで、自分の身の周りにおける問題について無関心な生活を送っていました。

ある日、先生が、唐突に「普段の生活の中で、差別を感じることはありますか。」と私たちに投げかけました。私は、「男女差別は感じないけれど、男女の差を自分自身で意

識しなければならぬことはあります。

例えば、休み時間のドッジボールや鬼ごっこです。」となんとなく答えました。五年生、六年生と大きくなり、同級生の男の子とのジェンダー差について、いつも意識してしまいません。男女の関係なく、みんなが、大抵学校でみんなと遊ぶときは、ドッジボールや鬼ごっこなど、限られた遊びです。投げて走っても差を感じるドッジボールや鬼ごっこへの参加は、少しためらいを感じてしまいます。私の周りの友達にも、同じような思いを抱く人は男女問わず、何人かいるようです。「男だから、

女だから」あるいは「男の子らしく、女の子らしく」というような、あからさまな男女差別という大きな問題はないのですが、普段の生活の中に男女を意識してしまいがちな活動があり、私や私と同じように感じる人には、身の回りにおける心の問題と感じています。

女だから」あるいは「男の子らしく、

女の子らしく」というような、あからさまな男女差別という大きな問題はないのですが、普段の生活の中に男女を意識してしまいがちな活動があり、私や私と同じように感じる人には、身の回りにおける心の問題と感じています。

そこで私は、他者による男女差別をなくしていくことはもちろんのこと、同時に、ジェンダー差を感じない、学校でできる活動という、もう少し踏み込んだものについて考えてみたいと思いました。

まず、ジェンダー差を感じないで、みんなで楽しめる活動にはどんなも



のがあるか考えてみました。例えば、表現運動です。ダンス表現は、経験値は関係しますが、ジェンダー差はあまり関係ないように思えます。男も女も関係なく、みんなが集まり、休み時間に気軽にできるようなになったら、とても楽しいだろうなと感じました。他には、ゲートボールがあります。たまにゲートボールをしているおじいさんやおばあさんを見かけることがあります。年齢もそれぞれでしょうし、男女もあまり関係なく楽しんでいきます。ある小学校では、クラブの時間に年齢も性別も関係なく楽しんでいると聞きました。私たちも休み時間や放課後など、学年やジェンダー差を気にせず、気軽に楽しむことができたら、とても楽しい生活が送れそうです。

いくつか考えてみましたが、他に

もまだまだあると思います。他者による男女差別のように、制度的な差別については、目に見え、多くの人が同じように感じるができるものです。しかし、抵抗感のような心の問題の場合は、目に見えることもなく、個々によって感じ方や考え方が異なることがあるので、当事者本人が語らなければ、なかなか表には出てこない問題です。

そこで、私はそういった心のわだかまりを少しでもなくしていくために、二つのことを実践したいと思います。一つめは、自分自身でみんなで楽しめる活動をもっと調べたり、考えたりしようと思います。二つめは、自分たちのこのような思いをみんなに伝え、抵抗感や気持ちを配慮した活動で、みんなに楽しんでもらうことの大切さを訴えたいと思います。



## 2 小さな一歩から

高田小学校 六年 稲箸いなはし 祐星ゆうせい

ぼくたちが大人になったとき、自然豊かできれいな地球に住むことができるのでしょうか。

ぼくの母は、出かけるときに必ず袋を持っていき、ゴミを持ち帰るようになっています。スーパーに買い物に行くときは、トレーやペットボトルのゴミを持って行き、分別して捨てています。母の姿を見て、ぼくも出かけるときには袋を持参したり、ゴミを分別して捨てたりすることが自然とできるようになりました。ゴミを正しく捨てることは、みんなが守るべきマナーであり、いつも当たり前前のように思っていました。

しかし、環境汚染は、地球のいた

る場所で進行しています。昨年、国語の授業で、海の環境問題について調べたところ、年間約八百万トンものゴミが海に捨てられている現状を知りました。その多くはプラスチックゴミであり、日本は、海へのプラスチックゴミの年間流出量が、世界の国の中で上位だということが分かりました。このままでは、二〇五〇年には、海の生き物の量を海洋ゴミの量が上回るといふ予測もあります。ぼくは、衝撃を受けました。このことがきっかけとなり、環境問題について考えるようになりました。

先日、サッカーの練習に行くと、隣の広場でゴミ拾いをしている人を

見かけました。近づいていくと、チームの監督でした。一緒にゴミ拾いをすると、そこには水風船のゴミやタバコの吸い殻など、本来なら持ち帰るべきであるゴミがたくさんありました。身近にこんなにも多くのゴミが平然と捨てられている現状を目の当たりにしたのは初めてでした。ゴミ箱に捨てられず、ポイ捨てされたゴミは、雨で流され、側溝や川に流され、海へと流出してしまうのか……。軽い気持ちでポイ捨てされたゴミが、大きな環境破壊につながっていることを実感しました。

人々が、安心してこの地球で暮らし続けていくために、二〇三〇年ま



で達成しなければならぬ目標、SDGsが定められました。持続可能な社会をつくるために十七の目標があります。しかし、このままでは、達成できないのではないかと不安です。

目標を達成するために、ぼくにできること。それは、呼びかけていくことです。母がぼくたち家族にしてくれているように、守るべきルールを共有し、継続して実行することが大切だと考えます。知らない人に注意をするのはなかなか難しいですが、友達がゴミを放置したり、正しく捨てなかつたりしたときは、見て見ぬふりをせず、声をかけていきたいです。

それから、行動力をもつことです。ゴミが落ちていても、自分のゴミじゃない、自分には関係ないと、つ

い目をそらしてしまいがちでした。これからは、監督がしていたように、積極的に行動できるよう意識していきます。いつも使っている学校やグラウンドなどの身近な場所から、使う前より綺麗にすることを心がけていきたいです。進んで行動できる人がたくさんいれば、身の回りがきれいになるだけでなく、海の環境、地球環境を守ることにもつながってきます。

数多くの生き物が生きるきれいな海にいくために、自然豊かできれいな地球にずっと住み続けていくために、ぼくたち一人ひとりができることを考え、行動することが、SDGsの十七の目標を達成するための第一歩となるのではないのでしょうか。まずは、小さな一歩から、始めていきましょう。



## 3 笑顔で明るく生きられる未来

桜川小学校 六年 高須<sup>たかす</sup> 莉那<sup>りな</sup>

「四歳児暴行死事件で母親逮捕」  
「娘に食事を与えず共済金搾取で母親逮捕」「スーツケースに男児の遺体で母親逮捕」

最近、このような残こくなニュースをよく耳にします。このようなニュースを見たり聞いたりするたびに、私はこわくなります。私のお父さんやお母さんは、私のことを大切に育ててくれています。だから、親が自分の子供を虐待するなんてことは考えられません。まして、自分が産んだ子供なのにお母さんが虐待をしてしまうのはなぜなのだろうと思いました。このお母さんにも、何か悩みや事情があったのかもしれない

ん。それでも、子供に虐待をするとは悪いことだと思います。

そこで、私は、このお母さんたちがなぜ自分の子供を虐待してしまうのかを調べてみました。SNSなどによると、子供を虐待してしまうのは、共働き世帯の増加と核家族化が進んでいることが一因だそうです。また、近所の人たちとの交流がないことや子育て世帯が少なくて孤立しやすいことなども原因になっているという事です。

たしかに、核家族化が進み、近くに助けしてくれるおじいさん、おばあさんがいなくなったり、頼れる人が少なかったりすると、いろいろな悩み

を自分で抱えこんでしまい、イライラすると思います。近所との交流がなくて、ひとりぼっちになってしまうと、子供に八つ当たりしてしまうのもわかる気がします。でも、イライラするからといって、暴力を振るわれたり、面倒を見てもらえなかったりする子供には何の罪もありません。

親のイライラやストレスが原因なら、それを解決するためにはどんなことが必要なかを考えようと思いました。

私の学級では、七月に「ストレスを解消する方法」についての学習をしました。その学習から、ストレス



はだれでも抱えていて、ストレスを感じるのは当たり前のこと。そして、大切なのは、そのストレスを解消する方法をきちんと知っているかということだとわかりました。ストレスを解消するには、自分の好きなことをしたり、だれかに悩みを聞いてもらったり、呼吸法やセルフタッチをしてリラックスしたりするなど方法があります。私は、これからの生活の中でやってみようと思いました。このことを、虐待してしまうお母さんたちにも知ってもらいたいと思いました。

私が住んでいる稲敷市では、「児童相談所虐待対応ダイヤル『189』へ」という取り組みがあります。「189」は「いち早く」という意味です。この取り組みは、虐待の可能性がある子供たちを助ける取り組み

みです。だれかが虐待に気付いたら「189」へ電話してほしいと思います。茨城県では、「茨城県子供を虐待から守る条例」をもとに、県民や関係機関などと一体となって児童虐待防止策を推進している「オレンジボン運動」に取り組んでいるそうです。しかし、茨城県でも児童虐待が年に三千件以上あり、年々増加しているそうです。市や県で取り組んでいることを生かすには、やはり、身近にいる人たちの気付きが大切なのではないでしょうか。

私は、児童虐待をなくすためには、子供と関わる大人が、子供に優しくと思いやりの心をもって接し、親や家族が子供を守りながら育てていくことが当たり前にならないといけないと思います。だから、自分の周りの人たちへの気遣いと、親として家

族としての自覚が大切です。

そのために、今、自分ができることは、ふだんから優しい気持ちと思いやりの心をもちながら、友達や家族、地域の人たちを敬い、感謝して生活することです。また、ストレスの解消方法を学んで生活に生かしたり、友達とのコミュニケーションを大事にしたり、近所の人たちと仲良くしたりすることも、積極的にやっていたいと思います。

将来、私が親になったとき、児童虐待がなくなり、子供も親も生きていく人たちがみんなが、笑顔で明るく、安心して生活できる未来を作りたいです。

## 4 私たちにできること

あずま西小学校 六年 藤ヶ崎 瑠花

「私たちにできることは何だろうか」

私は、小学校四年生の頃から、世の中で苦しんでいる人や困っている人たちの役に立ちたい、何かできることはないかなという気持ちをもつようになりました。そのきっかけは、当時見ていた医療ドラマです。そのドラマでは、自分より小さい子どもたちや今の自分と同じくらいの子どもたちが病氣と闘い、生活する様子が映し出されていました。世の中には、病氣と闘い、悲しい気持ちに耐えながら生きている子どもたちがたくさんいることに気がつきました。そして、私にできることはないか、

役に立つことはないかと考えました。いろいろ調べているうちに「ヘアドネーション」という活動があることを知りました。ヘアドネーションとは、病氣などで髪を必要とする子どもたちに、髪の毛を無償で寄付する活動です。寄付するためには、三十一センチメートル以上の長さが必要になります。そして、三十一センチメートルまで伸ばすには、約二年間かかるそうです。私は、それを知ったとき驚きとともに自分にできるのかと不安になりました。でも、病氣で辛い思いをしている人たちの助けに少しでもなればと思い、挑戦することにしました。

当日、美容室に行つてみると、五十センチメートルの髪の毛を切ることができました。（こんなに切ったんだ…）実際にやってみるととても達成感がありました。最初は、三十一センチメートルぎりぎりだと思っていました。思ったより長く切ることができて驚きました。また、困っている人たちの役に立てるのではと思いきや嬉しくなりました。家に帰り、母と一緒に髪の毛を送り、自分にもできることがあるんだと改めて思いました。

他にも、できることがないかと探している時に、私はとある動画を見つけた。それは海外で行われて



いる癌と戦う子どもたちに毛糸で編んだウィッグを届けるプロジェクトでした。これを見て、ヘアドネーションと似ているなと思いました。ヘアドネーションと違うところは、髪の毛ではなく毛糸だということです。毛糸だとプリンセスの髪型にしたり、好きなキャラクターの髪型にしたり、髪型のバリエーションが多くなるそうです。また、多くの人を集めて編むことができるそうです。「人の髪の毛で作るウィッグがあるからそんな活動はいらない」という意見もあると思いますが、毛糸のウィッグのよさもあると思います。ヘアドネーションと同じようにもつと広まってくればよいなと思います。

この二つのプロジェクトを通して、私にもできることがたくさんあ

ることが分かりました。この他にも、赤い羽根募金や盲導犬への募金など募金活動もあります。私たちの周りには、まだまだできることがたくさんあると思います。私たち自身が見つけようとするかが大切ではないでしょうか。だからこそ、皆さんも一度、「私たちにできることは何だろうか」と自分の心に問いかけてみてください。きっと、身近にできることがあるはずですよ。



## 5 ひとつの言葉

江戸崎中学校 二年 大野<sup>おの</sup> そよ

私たちが日常的に使う言葉である

「いつか」。この言葉に皆さんはどのようなイメージをもちますか。人によつては、適当で無責任な意味合い

で捉える人が多いかもしれませぬ。しかし、言葉の捉え方は人によつて

変わるものであり、私にとつてこの言葉は、「ずっとは続かないかも

しれない」という安心感を与えてくれる言葉なのです。この言葉のおかげで、前向きな気持ちになり、無理

せず自分のペースで頑張ろうと思ふことができ、心がすつと軽くなって

いく気がしました。大変な状況に追い込まれた私を、少し離れて見つめ

られるきっかけとなった言葉です。

さて、「やめたくてもやめられな

い」という体験をしたことのある人はいですか。

私はあります。小学校三年生のときと、中学校一年生のときに二度ほど

経験しました。何が原因かはわかりませんが、急に字が思うように書

けなくなつてしまつたのです。字を書くことが嫌いになつたのではあり

ません。正直、自分でもよくわからないのです。

自分の字についての記憶を遡ると、小学校低学年の頃は、小学校の

先生から「大きくて見やすい、いい字だね。」と褒められていました。

次第に、「常にいい字を書きたい。」

と思ひ始めたのです。そう思ひ始めてからは、自分の納得のいく字ではないと、書き直したくなつてしま

うようやうな字が書けなくなつてしま

いました。何度も自分の字を消しゴムで消し続けたときもありました。

一度、字が書けないモードに入ると、なかなか抜け出すことができま

せん。中でも、一番焦りを感じたことは、授業中にノートをとることが

とても大変な作業になつてしまつた

とても大変な作業になつてしまつた



ことです。先生やクラスメイトと同じタイミングで書き始めても、私が一行書き終えたときには、周りの友達はずでに次のページに字を書いています。クラスメイトが提出するワークブックの締め切りの日には、私は前回の締め切り部分までしか終えることができませんでした。周りから遅れていると感じるようになります、次第に心も身体も疲れていきました。

ただ、私の周りには、頼りになる人がたくさんいます。この悩みを、友達や家族、先生に打ち明けると、いろいろな方法を私と一緒に考えてくれました。小学校三年生のときも中学校一年生のときも担任の先生が親身になって考えてくれました。そして、解決に向けて多くのアイデアを出してくれました。また、この

モード中の私は、行動が遅くなってしまいます。そのような私に、いつも声をかけてくれる担任の先生や、周りにいてくれる友達に何度も助けられました。家族も、「字が書けないのは不思議だけど、そよちゃんもなぜこうなったのかわからないだもんね。でも大丈夫。できることはするよ。」と、悩む私に声をかけ、いつも応援してくれました。

数多くのアドバイスの中でも、私が一番助けられた言葉が「いつかなおるよ」という言葉です。「いつか」という時間はいつ訪れるかわからないけれど、そのあいまいな時間を表す言葉から、私は優しさを感じます。もちろん、その「いつか」が訪れた先に、何が待っているのかは私にもわかりません。

私と同じように今の自分をどうに

かしたい人はたくさんいると思います。しかし、すぐにどうにかしようとする、逆に苦しくなってしまうことの方が多くのではないのでしょうか。心にゆとりをもち、一步一步引いて自分を見つめてみてください。何か解決の糸口が見つかるかもしれません。苦しいことや辛いことは、ずっとは続きません。「いつか」を夢見ていけば、一歩ずつではありますが、着実に今の自分から変わっていくはずです。

## 6 「優しさ」とは何でしよう？

新利根中学校 二年 川嶋かわしま 凜りん

こんな人を見たことはありませんか？

電車で、年配の方に席を譲ってくれる人。拾った落とし物を、わざわざ交番まで届けてくれる人。道に迷ってしまった人に、丁寧に道案内をしてくれる人。私が読む物語やテレビドラマの中でよく見かける、優しい人たち。皆さんはこのような場面に、居合わせたことがあるでしょうか？

先日、私は病院に行く機会がありました。待合室で待っていると、中学生らしい男の子が入室してきました。彼はマスクをしていませんでした。その病院は、マスクの着用が義務づけられています。マスクを購入してこなかった場合は、受付で購入しなければならぬ決まりになって

います。しかし、その中学生は、診察代しか持っていなかったようで、「自転車で、家まで帰って、持ってきます。」と受付に言って、その場を去ろうとしたのです。すると、居合わせた一人の年配の女性が、「買ってあげるよ」といって、マスクを買い、その中学生に渡してあげたのです。

あのおばあちゃん、すごいな、と思います。私自身は、そのような行動を取ることは思いもよみませんでした。その場にいた人たちも同じ思いだったと思います。「他の人のことだから関係ない」「準備をしてないのだから、自己責任だ」、あるいは「知らない人に声をかけることが、恥ずかしい」「自分が注目されてしまうのがいやだ」という思

いが、心のどこかにあつたと思います。あのお年寄りを動かしたものは、一体何なのだったのでしょうか。

また、こんなこともありました。母と一緒に電車で出かけたときのことです。電車に乗り込んで、席を探したところ、一人分の席しか空いていない状態でした。母と二人で並んでは座れないな、と思った、そのときは座れないな、と思った、そのときのことです。席に座っていた女性が、すぐに隣の席に移ってくれて、私と母は二人並んで座席に座ることができたのです。私は、その心遣いに、人としての「優しさ」を感じました。その心遣いで、心がふわっと温まったことを、今でも覚えています。

小さな出来事をきっかけとして、SNSが炎上してしまう、この住み



にくい私たちの時代。そんなこの時代にあって、日常の中に「優しさ」は残っている。私は、そう信じています。私たちの周りには、たくさん「優しさ」が溢れているのです。

この世の中は、悲しいことや辛いことが、今なおたくさんあります。自分にとっては何気ない一言でも、受け取った相手にとっては忘れられない傷になってしまふ、そんなこともあるかもしれません。ネットで受けた誹謗中傷。ちよつとした冗談やからかい。相手が何をどう受け取るかは、分からないのです。でも、だからこそ、「優しさ」が大事なのではないのでしょうか。自分にとっては、何ということのない、当たり前前振る舞いが、相手を元気づけたり、助けたりする行動に繋がるかもしれません。「優しさ」によって、世の中を変えられることもあるのではないかと、私は思います。

「優しさ」とは、一体、何なのでしょう。一言では言い表せません。私が今所属する、「学校」という小さな

組織でも、友達との関係に気を遣ったり、トラブルに発展したりすることがあります。クラスでの役割決めも、なかなか決まらなことがありません。

でも、こんな友達もいます。周りの人のことを考えて行動してくれる人。譲り合いの精神で行動してくれる人。清掃の時、誰も気付かないところを自分から掃除してくれる人。机から物を落としたときに拾ってくれる人。毎日挨拶をしてくれる人。元気のない時に、「大丈夫？」と声をかけ、心配してくれる人。これが、私が今までに感じた「優しい人」たちです。数え切れないくらいいます。でも、あなたにとつての「優しさ」や、みんなにとつての「優しさ」は、少し違うかもしれません。この世の中には、いろいろな「優しさ」があるのだと思います。

私はこれまで、本当に優しい人たちに囲まれて、生活してきました。たくさん「優しさ」に触れました。「優しさ」とは、人から人へと繋がっ

ていくものだと思います。だから私も、どんな小さなことでもいいから「誰かのために行動できるような人になりたい」と思っています。まずは、友達に対して、思いやりの気持ちをもち、相手の立場になって考えて行動できる人間になろう、と思っています。そして、そんな私の行動が、誰かの心に残って、またもう一つ「優しさ」が増えるといいな、と思っています。

## 7 読書の魅力

桜川中学校 二年 船串 梓

ふなくし

あずさ

皆さんは本を読むことは好きですか。私は図書委員会に所属していて、図書委員として思うことがあります。それは、ニュースなどでも取り上げられています。本を読む人が減ってきているということです。私はこれについて、ゲームやスマートフォンに触れる時間が多いからなのではないかと思っています。

私は読書が好きです。本にはネットと違った魅力やメリットがあると考えています。その一つとして、今日は私がある本に出会い、自分自身が成長できた経験をお伝えします。中学校に入って私は、周りの友達に恵まれていたのですが、人間関係に

自信が持てない時期がありました。

部活で活躍する人、勉強ができる人、クラスの中で頑張っている人。そんな人たちを羨ましく思っていました。だんだん自分と比較するようになり、私は誰かに認めてもらいたい、どうやったら認めてもらえるのだろう、というように、他人の評価を気にするようになっていきました。しかし、他人の評価を気にすればするほど自分が辛くなっていきました。

そんなとき、私は『嫌われる勇氣』という本に出会いました。「健全な劣等感とは、他者との比較の中ではなく理想の自分との比較から生まれるもの」という言葉が目に見え

込んできました。他人との比較ばかりだった私が「自分との比較」を考え始められた言葉です。今まで、私は自分の目標に向けて取り組むときに、誰かと比べて「私は全然駄目だな」と自分の目標を叶えるという本来の目的を忘れてしまいがちでした。しかし、自分の目標を叶えるためには、理想の自分になるには、今の自分に何が必要なかを考えることが大切だということに気づくことができましたのです。

それでも私は、認められたいという欲を持つこともありました。その時には、こんな言葉に助けられました。「自分のために生きていないの



であれば、誰があなたの人生を生きてくれるのでしょうか」・・・この言葉を見たとき、心の底から本当にその通りだなと思いました。他人によく思われるように行動していたら、それは、自分の人生ではなくて他人の人生になってしまうのです。

私は、「人の期待に応えないといけない」「人に認められないといけない」と思ってしまうことがよくありました。この思いは、自分にとっては重荷に感じるもので、人の評価で一喜一憂し、疲れてばかりでした。例えば、周りの人との点数や順位を意識しすぎて、どうやって勉強したらいいかわからなくなっていました。しかし、自分が成長するために、「どうすればいいのか」を考え始めてからは、苦手教科を中心に勉強したり、友達に教えてもらったりしました。そうすると、少しずつで

すが、今まで解けなかった問題が解けるようになっていくなど、変化が現れたのです。自分の人生への一歩です。

読書を通して知った言葉から、自分のために行動するように切り替えたのです。そうすると、とても「自分らしい自分」になって、楽しいことが増え、悩みも減りました。「自分のために」というと少し自分勝手にも聞こえますが、私は自分のためにということとは「自分を大切にしている」ことだと思のです。人のために動ける人は自分に余裕を持っている人です。だから、まずは自分を大切にすることから始めてもいいのではないのでしょうか。

私は、読書で出会った言葉で自分が成長できたと感じています。これも本の一つの魅力だと思えますが、さらに本の魅力やメリットを問われ

れば、私は自分自身の成長だけではなく、たくさんの知識を得られることを挙げるでしょう。そして、読むことそのものが楽しいと感じられることを伝えたいと思います。読書はネットと違って、映像や音がない分、一人の静かな空間で熱中できます。文字でしかわからない、人物の声や姿、世界観を自分の中で想像しながら読めるということも本にしかない魅力で、楽しさだと思います。

自分を変えてくれる言葉に出会ったり、魅力たっぷりだったりする読書。私は、たくさんの人に本を読んでも楽しんでもらいたいし、私もそうしていきたいと思います。

## 8 ルールやマナーの大切さ

東中学校 三年 山中 夢叶  
やまなか  
ゆうと

私はあるニュースを見て、ルールやマナーを守ることがどれほど大切なことかということに気付きました。

二〇二三年一月二十九日、私はテレビのニュース映像でとんでもない光景を目にしました。それは、高校生が回転寿司店で備え付けの醤油の差し口を舐めている映像でした。

私はこの映像を見たとき、とても驚きました。なぜなら、他の人も使用する物を平然と舐めていたからです。また、それを楽しみながら動画を撮っている人がいる、ということも信じられなかったです。

この映像はまたたく間に拡散さ

れ、ネット上で炎上しました。この動画に映っていた高校生は、世間からはたくさん批判を受け、損害を被った回転寿司店から訴訟を起こされることになりました。

この出来事から「しょうゆぺロぺロ高校生」などと呼ばれ、日本中に知られる事件となりました。軽はずみな気持ちで行った悪ノリによって、この高校生は住所や通っている高校などの個人情報やネット上に晒され、多額な損害賠償を請求され、最悪の結末を迎えてしまいました。また、高校も退学し、明るい人生が一気に暗くなってしまいました。

この事件は二度と起きてはならな

い悪い事件ですが、私は事件を通して、改めて気付けたことや新しく学べたことが二つあります。

一つめは、未成年による犯罪だからといって罪は決して軽くないということです。この事件を知るまで私は、未成年は逮捕されないから罪を犯してもそこまで重くならないものだと思っていました。しかし、この事件によってそれが大きな間違いであることに気付かされました。実際、十四歳以上になると罪を犯してしまつたら未成年でも、「犯罪少年」と呼ばれ、逮捕されることがあります。そして、事件でもあったように損害賠償を請求されたり、ネット上



に拡散され個人情報特定されたりすることもあります。そのため、未成年だから罪は軽いということは一切ありません。

二つめは、ルールやマナーを守ることがどれだけ大切かということです。この事件は、高校生がしようゆの正しい使い方を守らなかったことで起きてしまいました。そのため、回転寿司店のルールに則った正しいしようゆの使い方をしていれば、この事件は起きず、この高校生は損害賠償を請求されたり、個人情報を晒されたりせず、回転寿司店も大損害を受けたりせずに済んでいました。ルールを守ることが、事件の防止にも繋がるためとても大切です。

ニュースを通して、未成年による犯罪であっても罪に対する代償は大きいということや、一つの悪ノリが

大きな事件に発展してしまう可能性があることを知ることができました。それから、ルールやマナーを守ることができ、事件を防止することができたことも知ることができました。そのため、ルールやマナーをしっかりと理解し、守っていくことはとても重要なことだと私は考えます。



## 9 行動することの大切さ

江戸崎総合高等学校 二年 黒田<sup>くろだ</sup> 龍毅<sup>りゅうぎ</sup>

もし、みなさんの目の前に倒れている人がいたら、あなたはどうしますか。見た瞬間に手を差し伸べてあげられますか、それとも見て見ぬふりをしてそのまま通り過ぎていきませんか。仮にその倒れている人があなたの大切な人だったら、何も考えずに助けると思います。ですが、名前も顔も知らない赤の他人だとしたらどうでしょうか。大抵の人はすぐに助けに行くことはできないと思います。そのような状況に直面したときに、あなただったらどうするか考えてみてください。

私が小学生だったある日、家族と日光東照宮に行きました。真夏の日

差しが厳しい中、階段を上っていると、階段の横で倒れている人がいました。おそらく熱中症で倒れてしまったのだと思います。顔色も体調も悪そうだったので、私は助けに行こうと思いました。しかし、当時の私は何をしたら良いのかわからず、動くことができませんでした。苦しんでいる人がすぐ近くにいるのにもかかわらず、通り過ぎていく人たちと何もできない自分に嫌気がさしているとき、私の背後から「大丈夫ですか」という声が聞こえました。それは少し遅れて登ってきた母の声でした。母は当たり前のように手を差し伸べて、時間をかけて登ってきた

階段を戻り、救急車を呼んで倒れていた人を助けたのです。何もできなかった私はものすごく悔しい思いをしました。声をかけるぐらいのことは小学生だった私でもできるはずだったのにと、情けなさで自分のことをひどく責めてしまいました。それと同時に胸に刻んだのです。どれだけ小さいことでも、助けを求めている人がいたら、手を差し伸べると。それからは、落とし物があつたらすぐに拾い持ち主に届けたり、体育のときに怪我や体調不良の人がいたら声をかけ、保健室まで手を貸したりと、小さなことでも行動できるようになっっていました。



そして中学生の時の体育祭で、以前と同じような状況に直面しました。気温三八度という炎天下の中、私たちは熱い戦いを繰り広げていました。体育祭がすごく盛り上がりを見せていたとき、事件が起こりました。熱中症で一人の生徒が倒れてしまったのです。ところが、倒れている生徒をただただ見ているだけで誰も助けに行きません。私は小学生の時の自分と周りにいた生徒の姿が重なって見えました。あの時動けなかった自分は、このような情けない姿をしていたのかと少し恥ずかしい気持ちになりました。しかし、あの時の動けなかった自分から変わった人だと思いい行動してきた今の私は行動することができず。倒れている生徒に手を差し伸べ、保健室に連れていくことができませんでした。あとは先生

に任せて戻ろうとしたとき、助けた生徒が目を開けて「ありがとう」と言ってくれたことは今でも覚えています。

困っている人、助けを求めている人は必ず身の周りにいます。大切なのは、そういった人に気づき、手を差し伸べられるかだと私は思います。みなさんも自分の周りに目を向けてみてください。あなたの一声で、あなたの少しの行動で救われる人がいるかもしれません。そういったときに行動できる人が少しでも増えることを私は願います。



## 10 私が私でいられるのは

江戸崎総合高等学校 二年 中村 颯夜

物心ついたときから、かつこよく

した。

なりたいたいと思っていた私。フリフリのついた服なんか嫌いだっだし、スカートなんか泣いて嫌がっていました。

「女の子が女の子に興味があるなら、精神科に行ったほうが良いんじゃない？」

た。男の子とばかり遊んでいた、髪をバツサリ切って短くしたり、男の子に間違えられるほどでした。中学では女の子に告白されることが何度かありました。付き合ったことも

その言葉に対して、私がセクシャルマイノリティであることを知らない友達が言いました。

ありました。私は恋愛に性別など関係ないと考えるようになりました。

「颯夜はそんな子じゃない。」

しかし、このことを周りが知ったらどんな顔をするのだろうか、どんなことを言われるのだろうか、とても怖かったです。

周りの人の言葉よりも、かばってくれたはずの友達の子の言葉のほうが私にとってきつい言葉でした。この時に、

中学の頃、周りの人から言われま

ありのままの自分の姿では、本当の自分の生き方では、受け入れられないと気づきました。自分が嫌いになり、このままで本当しいのだろうかと思いがなくなりまし

た。自分らしく生きられないことがこんなにも苦しく、悲しく、辛いことなのかと思いました。

しかし、高校ではセクシャルマイノリティである私を受け入れて理解してくれる人が多くいます。最初は驚いていたり、少し怪訝な顔をして

り、偏見を持っていたりする人はいましたが、当たり前のように接してくれる人が増えました。同性で付き合い合っていることに対して理解してくれる人が周りに多くいる環境は、私にとって心の支えになっています。

まだ、偏見を持っている人や、嫌そうな顔をする人、受け入れがたいという人もいます。それでも、周りに



いる多くの理解ある人々が私を守り、助けてくれています。同性とお付き合いしていることを、「気持ち悪い」など言った人々に対し、私よりも怒ってくれる人もいました。励ましたり、何気ない言葉で救ってくれたりする人もいました。自分のことを認めてもらえないだろうという不安や、自己嫌悪になったときも、周りの人の理解が私を支え、守ってくれました。私が私でいられ、私が私でいたいと思えるのは、ありのままを受け入れてくれている周りの人々の理解のおかげです。

今では、「かわいい」ことにも興味を持つようになり、どんな姿にでもなれるようになりたいと思っています。かわいいと言われるのも嬉しいし、かっこいいと言われるのも嬉しいです。制服でスカートを履くの

も全く苦じゃないし、髪型もロングは似合うのか気になって、自ら伸ばしています。まだ、自身を持って、自分はセクシャルマイノリティであると言う勇気はないですが、自分らしさを探し、今の自分を楽しめています。

最後に、あなたはあなたらしく生きていくでしょうか。誰かの価値観を押し付けられて苦しんではいないでしょうか。誰かのものさしで測られた善し悪しに不満はないでしょうか。人の数だけ性に対する考え方があります。お互いに違いを認め合い、多様性を受け入れる社会が広がり、自分らしくいることに苦しみを覚える人が少なくなっていくってほしいです。

その一歩として、私はコミュニケーションや学びを通して、自分に

とって当たり前で、相手にとって当たり前でない事柄が何なのか、考えるようにしていきたいと思います。

今年は学校生活が通常に戻ったためか、日常生活の中に問題意識を見出し、それについて考えて実践しようとする発表が増えました。男女差や環境問題、

考えること、思いを相手に伝えることを実践したいと思いました。愛さんの「みんなが楽しめるために」という優しい心が伝わる発表です。

児童虐待、慈善活動、自己の生き方、読書による気付き、公共心、道徳的实践、性的少数者についてがテーマで、どの発表も自分と向き合い、真剣に生きようという気持ちが伝わる内容です。

高田小学校六年・稲箸祐星さんは、海の環境問題について調べ、将来は海洋ゴミの量が海の生き物の量を上回る予測を知って衝撃を受けました。サッカーチームの監督がゴミ拾いをしてるのを見て一緒にゴミ拾いをし、持ち帰るべきゴミが捨てられていた現状に気がきました。

沼里小学校六年・清宮愛さんは、自分たちの成長に伴い遊びや運動の中で男女の差を強く感じるようになりました。愛さんは男女関係なくみんな仲良く楽しみたいと思い、男女の差を感じないでみんな楽しめる活動について考え、表現運動やゲームボールなどを例示しました。

桜川小学校六年・高須莉那さんは、児童虐待により子ども

の命が失われた痛ましい事件から、なぜ母親たちが虐待をしてしまうのか調べ、共働き世代の増加や核家族化の進行が孤立を生み、そのストレスが原因と考えました。莉那さんは、ストレス解消法の活用や関係機関への相談に加え、身近な人間の気付きが大切と考えました。莉那さんが考えた自分ができることは、

の毛を切ることができたことに達成感と喜びを味わい、他にもできることを考えるようになりました。瑠花さんの社会や人の役に立つことを幸福と感じる生き方を大切にしたいです。

周囲の人の心を温かくして勇気を与える行動です。莉那さんの実践を心から応援したいです。

江戸崎中学校二年・大野そよさんは、小三と中一の時に字を思うように書けなくなり、授業中にノートを取れず、心身共に疲れていきました。ただ、そよさんには親身に支えてくれる担任の先生や友達、家族がいました。その中で「いつかなおるよ」という言葉から心に余裕ができ立ち直ることができました。自分を客観的に見ることでより困難を受け入れ、解決に向かえます。そよさんを支えてくれる人が必ずいます。これからも安心して生活してください。

あずま西小学校六年・藤ヶ崎瑠花さんは、医療ドラマがきっかけで苦しみや困難を抱えている人たちの役に立ちたいと思うようになりました。瑠花さんが実践したのはヘアドネーションという活動です。自分の髪の毛を寄付するために何年も頭髪を伸ばし、五十センチメートルの髪

新利根中学校二年・川嶋凜さんは優しさについて考えました。病院でマスクを忘れた中学生へのある女性の関わり方や電車に乗った時の乗客から受けた思いやりから、人の優しさを感じました。凜さんは自分の経験から、多様な優しさがあることに気づき、誰かのために行動できるような人になりたいと思いました。優しさとは、他人に関心をもちその人のことを考えることです。気づきを大切にした凜さんの優しさは、必ず周囲に広がっていくと思います。

桜川中学校二年・船串梓さんは、他人の評価を気にし辛くなっていた時、ある本の言葉から他人との比較から自分との比較に考えを変えることができました。また、別な本の言葉から、自分が成長するためにどうすべきか

を考えるようになり、それらにより自分の成長を実感するようになりました。本との出会いにより変容できたのは、常に自分を見つめ考える姿勢があるからです。今後も本との出会いが梓さんの人生をより豊かなものにしていくと思います。

東中学校三年・山中夢叶さんは、テレビのニュースから、回転寿司店での軽い気持での悪ふざけが原因で、当人が予想もしなかった重い責任を負うことになってしまった事件を知り、未成年の犯罪でも罪は軽くないこと、ルールやマナーを守る大切さについて考えました。ルールやマナーを守ることは、相手を守るだけでなく、自分をも守ることになります。ルールやマナーの意味を考えて理解することの積み重ねが、夢叶さんを強くし

ていくと思います。

江戸崎総合高等学校二年・黒田龍毅さんは、小学生の時に暑さで倒れていた人を助けなかった自分を責め、救助した母親の行動を見て自分も困っている人に手を差し伸べたいと思うようになりました。中学生になって、体育祭で熱中症で倒れてしまった生徒に手を差し伸べ、助けることができました。龍毅さんの自分から変わりたいと思う気持ちに己に勇気を与え、行動できたのだと思います。龍毅さんの人のためになりたいという強い気持が伝わる発表です。

江戸崎総合高等学校二年・中村颯夜さんは、セクシャルマイノリティへの周囲の言葉に傷付き、自分らしく生きられない辛さを味わいました。颯夜さんに力を与えたのは高校生になってから

の友人たちです。颯夜さんを理解して受け入れ、支えてくれました。まだ理解できない人たちがいても、颯夜さんを受け入れる仲間がいるので今の自分を楽しめています。多様性を理解して受け入れることが一人一人が生きやすい社会になるのだと実感する発表です。

最後になりますが、自分と向き合い、思いを堂々と発表された皆さん、お忙しい中で丁寧にご指導いただいた先生方、子供たちのためにご支援いただいた関係者やご家族の皆様感謝申し上げます。

《青少年育成稲敷市民会議》

会 長	和 田 克 典
副 会 長	高 野 貴 世 志
副 会 長	篠 田 啓 子
副 会 長	糸 賀 妙 子
大会部長	白 田 京 子
	伊 藤 均
	小 貫 勉
	板 橋 好 美
	寺 崎 久 美 子
	根 本 浩 子
	宇 佐 美 充 子
	坂 本 千 枝 子
	助 川 幸 子
	野 澤 貞 子
	根 本 恭 一
	飯 塚 卓 也

〈主 催〉 青少年育成稲敷市民会議

〈協 力〉 稲敷市・稲敷市教育委員会・稲敷市学校長会



青  
少  
年  
気  
に  
か  
け  
目  
を  
か  
け  
声  
か  
け  
よ  
う

